1: 5 & 7. ——, 1950. Jour. Hattori Bot. Lab. **3**: 47-48, fig. 39. Herzog, Th. 1930. in Handel-Mazzetti, Symb. Sinic. **5**: 43. Kamimura, M. 1952. Acta Phytotax. Geobot. **14**: 107, fig. 1. Kashyap, S. R. & R. S. Chopra, 1932. Liverworts of the Western Himalayas and Punjab Plain, pt. **2**: 21. Mizutani, M. 1961. Jour. Hattori Bot. Lab. **24**: 149-152, fig. V, 18-26. Schuster, R. M. 1961. The Bryologist **64**: 159-160, 166-167. ——, 1963, Nova Hedwigia, Beiheft **9**: 99. Stephani, F. 1912. Species Hepaticarum **4**: 744. ——, 1924. Species Hepaticarum **6**: 564. Verdoorn, F. 1934. Ann. Bryol. suppl. **4**: 118 & 121-123.

* * * *

Tuzibeanthus (ツジベゴヘイゴケ属) は苔類クサリゴケ科に属し，一属一種で日本・支那・ビルマ(新産地)および西ヒマラヤに不連続的に分布する。Schuster は本属を *Mastigolejeunea* の亜属としたが賛成できない。*Ptychanthus* に最も近い属である。最近ビルマ・西ヒマラヤの標本中に本種を見つけたので，この機会に本属に関する知見を整理し，分布図を作成した。本属はアジア温帯要素に属し，好石灰岩性と考えられる。

104 ページからの続き. Continued from p. 104

○ヒロハヒルガオ *Calystegia sepium* R. Br. var. *communis* Hara ヒロハヒルガオは北半球の湿帯各地に分布しているが，日本ではこれまで北海道と本州（北部と千葉県）から報告されているだけのようである。ところがわたしは 1966 年8月，これを壱岐島の西海岸近くで発見した。生育地は壱岐島（長崎県）郷の浦町里触（触は他地方でいう部落に当る）で，海岸から 100〜150 m，標高 10 m 内外の所である。また分布地と海岸の中間には1軒の農家と背戸の山がある。生育地は道路の両側にあり，うち海側のものはラッカセイ畑の畦畔の草地や藪で，反対側のは路傍と続く畦畔に及んでいる。後者の群生地に続いてコヒルガオがはえているが，一部分入りくんでいる所もある。この生育地全体で 20 余株が数えられるが，西日本全域に未記録の本種が，玄海の孤島壱岐だけにどうして分布するのかその解釈に苦しむ。また壱岐産のヒロハヒルガオは，たくさん蕾をつけながらあと 2〜3 日で開花という段階で全部落ちてしまう。しかしこれも1年の観察で，検討不充分であり，分布の問題などとともに続いて調査研究を進めたい。

(長崎県壱岐郡郷浦町 品川鉄摩)

［表紙カットの解説］ トウモロコシの抽象化。これは南米ペルーの中部チャンカイ流域で大体 8〜900 年前に発達した織物に現われた図案である。鳥，魚，人物，等の模様が多い中では少数しかでてこない例ではあるが，不定根(?)を示す根元，太い茎，先が分れた雄の穂，そしてふとった果実又は雌花序をうまく表現している。鳥が2羽いるのが面白い。足がはなれ，しかも長い嘴をつき差しているところから察するとハチドリだと私は思うのだが，トウモロコシのどの発育期に蜂鳥が来るのか，それとも単なる模様にすぎないのか気にかかっているのである。ペルー国リマの天野美術館の所蔵品から摸写した。 (前川文夫)

[Explanation of the cut in the cover] An abstract figure of corn plant woven on the tapestry discovered from the ruins in Chancay valley, Peru. This figure is drawn from the specimen deposited in Museo Amano, Lima. (F. MAEKAWA).